

1. 略歴

1983年3月	東京大学文学部美学芸術学専修課程卒業
1983年4月	同大学院総合文化研究科比較文学比較文化専門課程修士課程入学
1985年3月	同修士課程修了
1985年4月	同博士課程進学
1989年3月	同博士課程単位取得退学
1989年4月	和洋女子大学文家政学部英文学科専任講師
1994年4月	和洋女子大学文家政学部英文学科助教授
1998年4月	和洋女子大学人文学部国際社会学科助教授
2003年4月	和洋女子大学人文学部国際社会学科教授
2008年4月	和洋女子大学人文学群日本文学・文化学類教授
2015年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

分析哲学、美学

b 研究課題

フィクションの存在論の研究から出発し、虚構文の論理構造の解明から論理学の「可能世界」概念の応用へ、そして「可能世界」概念そのものの論理の研究へと進んだ。その過程で、自然科学の「多世界」「多宇宙」の概念と「可能世界」との関係の考察を迫られ、それらの概念に立脚した「人間原理」を方法的基盤とした諸議論の中で哲学問題を再構成する仕事を進めた。現在は、芸術の現状に対して人間原理的（進化論的）な説明を与え、見かけの法則性を観測選択効果へ還元する論理を追求している。

c 概要と自己評価

哲学問題を人間原理の観点から考察し直す仕事については、比較的長い論文を順次発表することができている。心の哲学、ロボット科学、人文死生学といった分野の研究者と研究会を重ねる中で、議論の中で人間原理の射程を測る手ごたえを感じているが、長年の研究テーマであるフィクション論の人間原理的再構成については、まだ構想が固まっているとは言いがたい。それでも、いくつかの下位カテゴリについては試論的な論考を発表できており、現在、サブカルチャーにおける例外的な実験芸術的試み（具体的には、アニメにおけるコンセプチュアルアートの実験）の事例を分析することから、人間原理的フィクション論の端緒を掴みつつあるところである。

コンセプチュアルアートは芸術の伝統的本質を欠いた例として挙げられることが多く、「芸術の定義」という分析美学の中心問題を左右する類型と言える。その「芸術の定義」と他の問題圏（とくに「芸術作品の解釈論」）を統一する試みを、2016年10月の美学会第67回全国大会で発表するべく、準備中である（「芸術の統一理論に向けた「再帰的定義」の可能性——C. L. スティーブソンのモデルから」）。

なお、専門研究と並行してクリティカルシンキングの単行書を啓蒙目的で発信してきたが、2016年9月頃に、『論理パラドクス』（二見書房、2002年刊）の改訂版を文庫本（二見文庫）で出版する予定である。

d 主要業績

(1) 著書

単著、『思考実験リアルゲーム——知的勝ち残りのために』、二見書房、2014.3、263p.

単著、『下半身の論理学』、青土社、2014.10、388p.

単著、三浦俊彦、『天才児のための論理思考入門』、河出書房新社、2015.6、185p.

(2) 論文

三浦俊彦、「フィクションとシミュレーション——芸術制作の方法論からジャンル論へ」、中村靖子編『虚構の形而上学——「あること」と「ないこと」のあいだで』春風社、361-442頁、2015.2

三浦俊彦、「サウンドホライズンに見る芸術と政治の接点 研究ノート」、『和洋國文研究』、50、94-107頁、2015.3

三浦俊彦、「プラグマティズム美学の限りなき分岐点」、『現代思想』、7月号、96-106頁、2015.6

Toshihiko Miura、「A Preliminary Sketch for the Applied Anthropoc Arguments ——Away from God into Spatial Reincarnation」、『JTLA (Journal of the Faculty of Letters, The University of Tokyo, Aesthetics)』、Vol.39、53-68頁、2016.2

三浦俊彦、「観測選択効果」の視点による進化芸術学の可能性、『文化交流研究』、第29号、1-20頁、2016.3

(3) 学会発表、講演記録

国内、三浦俊彦、「三浦俊彦 芸術作品としてのポツダム宣言——レディメイド文学の提唱——」東海大学、2014.8.1、
『総合文学ウェブ情報誌 文学金魚』 <http://gold-fish-press.com/archives/26878>

国内、三浦俊彦、前田高弘、水本正晴、金杉武司、「多義性の誤謬としての点滅論法」、日本科学哲学会第47回大会
ワークショップ「ゾンビと点滅論法と哲学的論争」、南山大学、2014.11.15

国内、三浦俊彦、「人間原理から眺める「エンドレスエイト」——コンセプチュアルアートとしてのアニメ」、アニメ
国際シンポジウム 日本アニメの歴史と現在、和洋女子大学、2015.10.3

国内、小島康次、三浦俊彦、新山喜嗣、渡辺恒夫、「精神医学と現象学的心理学から死と他者の形而上学へ」、日本質
的心理学会第12回大会、宮城教育大学、2015.10.4

国内、三浦俊彦、「言語の生物学的解明とは？——記述か説明か；人間原理の観点から」、第4回文学部講演会、千
葉大学、2015.11.12

(4) マスコミ

「BOOKSCAN × 著者インタビュー」、『BOOKSCAN』、2014.7.22 <http://www.bookscan.co.jp/interview/422>

「今年の執筆予定」、『出版ニュース』、2015年1月上・中旬号、p.47、2015.1

「認識は常識から——最低限、母国語に通じる日本であってほしい」、『ポリタス』特集：「戦後70年——私からあ
なたへ、これからの日本へ」、2015.10.16 <http://politaz.jp/features/8/article/466>

「今年の執筆予定」、『出版ニュース』、2016年1月上・中旬号、p.47、2016.1

(5) その他

連載、「偏態パズル」、『総合文学ウェブ情報誌 文学金魚』、2014.4～2016.3 <http://gold-fish-press.com/archives/7755>

コメント、『巨匠の失敗作』（岡澤浩太郎著、東京書籍）、第12章「デュシャンと泉」、第14章「ポロックとブルー・
ポールズ」、pp.187-198、pp.219-231、2014.9

対談、「Interview of gold fishes 第15回 三浦俊彦×遠藤徹対談 モンスター文学を求めて」、『総合文学ウェブ情報誌
文学金魚』、(前編)2015.10.1、(後編)2015.11.1、<http://gold-fish-press.com/archives/35934> 35967

エッセイ、「オトナの科学」、『サイゾー』、2015年12月号、pp.66-69、2015.11

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、『科学哲学』、編集委員、2014.4～2016.3